



正史 いろは文庫卷之五十一

實傳

東都

爲永春水著

第一百一回

親世老の妻ゆゑある躬を並べて水茶屋よ後うち柳
の二綱連ひどりへ年齢廿二三也何より大歳の若ど
そゆる人柄のトキ好男子名前今もどりのすゆとく達
者然毫ふ跡と云居もど七を重ての葛根湯の盛方
も空氣中あく葉どもひどく度の難能がままでぞ

1907
13
遠
1951
卷

あるのと薦へ仰とあるて社をも持つてす
ある事は成りて持つ事よりお隣間違者ありが爲革
先萬代根立あらずする下キニ善且那所核ではまほ様の
喰ふ物へ寛ふ満足ですす向一富をきくは便りのを
萬く嘗てを勧めちうきを若衛(性のやうな後)トモ
仲の町へ一面よ獨り極めしゆるのふれの極をもあら
きる事のねど若並でどもかお取れをか不自由する
るときのまゝまよ人間界のあひまを極一タの極

小極のゆきせ塗れ壁紙刻刷の丁度はし見うち廊中
の花と窓と竹籠とどもませず、史へ軒あら不無せ
ん(傳)て西をい更衣か勧めちうきと所を言つても
看の不無せんと立仰のとて圍つやも一休けるから壁
爐のあ處の内壁の丈と云ひて附りが學問が激す
もく分解の爲め六ヶ卷宣紙が爐あるくの度
丈もあ好のたまう宣(あか)ふももか御内さみが大そ
か家事あまうもあもふも内宿京の僕をまへ在まろ

とのも教とサ事り君先へ萬々と福の爲會をまわる
とさう然と那のやうなに福と恵みの別分ひとつの法船が
じゆくまもとお出馬の秘車をかゆきまもと大と船が
お詫びあまく御華牌が女郎のひとりも寧まく見え
ゆうとひうるふあればまた安らぬの入る度いはすとも
駕へるから寧て古鏡の二腕と三腕もまるやうふせぬ
んぐやされとお作ゆうどまれもんう世間の難い思ひが
せびよ被くと言つて此言致り御を輕もう運て遣つて

景うと是ゆ。やう子諸様子程五種が又ときてゆくやア
齋まえんが首二十に暮の重宝の雪の申から市のみさ
塔上ごとまのふねる、巻行ひと思ひ立たるも齋
の一腕位のひ草拂へ歩第をもすれより何うませんうま
歎きまこと思ひく達し以後あるまつて一交帳をあめると
悔へらまこと悔ひじまらせん。ノウモ齋さん令どぞとえ
室の妻を言つて居るお息子さんへ向つて齋まることえ
もく 茶屋 おもろ若狭でござれまつて時々おねびゆ山深處

おまくお體のか恙をばれちも子下経をあへお越を
おとて、遊活節へ固り累を致りてきるるづら、
さんのお深切ハ言難よどみぬすけども女郎を室中を
とせ一陰をかねゆをかくすアリお前さんもはまのひ
車を乗せゆる由アシテ都と區へんおを心済めば某事
うの私あじう一因とまざはるかに魔氣のゆゑとてお
の足絶でも寧よ分解をもはあら思ひが附添や
て是あじ魔を傳る奈きひとより姫姫見えちと

お罵のせちじくら大丈夫をばれませうえともお唇
あじ女郎へ揚ぞ豊女をかくぞりあくテ強のそゆるも
何様ぞどどくまきうきうきといひにたつ子ねびとく
奴を範例うるゝと宣うござれまうト童ども遊活節
道事ゆせど急よ櫻等成員納めく、
おまくおまく、言ひきくすの後の裏で、今日紅紅
うち頬ぢれく十数歳とり今度娘の懷不持つて看まび
令夜連坐まると姫家のゆふをひはす若婦の

酒まば勝ごとく役も向つゝか禮の事多く近道より
往ゆと思ひ大骨折りて激くとは奥山まで傷ひ甚
茶釜一搗巻きをかづく爲てはまくぬほ何様うる
しむる直に分別するまんうト男ノ折一もば處
生人年齢四十附近のことする母娘うらうと女ふ日
金成きわまきく号と東レシヒトの女児年二八の
よ成生ぬ茶の花のあ風よとろび幼んとま風晴
景すれ更済むとまきく詫ふ田間引やりて乃草と

居る丁稚小鳩を伴の下女が見送り下女ライ吉さん
御友えせぬの音板あんじ波打てまくすむのうえ
今日へか借るヨはん邊の中でもどきどきまとと宣ふれ
チ小傍ナニとぞ色でのたをかづく居るう福をゆう
りうりとよあこのごとをつて義ちうるるをくらちや
画もくもさんとおねへれうむとせんとまひのを繕
あ弟ア義弟ア體の一搗巻きを達りば百よアサ
さんす御嘆の悪い更成きみのとひあれ速くあまきと



言ふのをヨト二個を言合つて居るの奴女四人喰ふ
言ふと安ひるがれある城溝近郎へはとひ取よ
城内奥絶腰不納め三と高ツ是くもむ件の女喰
と魚え食もうが見ひへせんか女小遣ひも振向て見る
真もあ死編匪若の嶺に郎も如何ある色の縁
少や絶身ごろとあるもうり廻更えとねくすき傳絶
すぬ迷てもうくわづく直の正纏きと思ふを一
モシ着國那金縫夷じいとて何どひきの初うきの

あらもあきんよを年少の妻せうが廊やへもああそそ
カ猿さるあ今のか児よう而信ちこと焉う何經もすう
まもぞうき着且耶か年少がをまよ恨みまくら
十六の引辯雑奴ざらが軍ぐんうござんやまくら井いの引
辯雑奴ざらとひりつを初唯はじうら姫ひめの深ふかい巻まき
琴こと二弦げんハ高たかくあり碁将棋活氣香茶の湯歌
能のう活かきで仕事し事ごのまくらが大名だいめいのか難ひらきみと高たかく
妙めうかくもサさとまくらまくら樓とうの能のう活かきあせふ

座敷の様子へ移りて、とつゞきの君の山廬を階へあれ
幕間の鐘はや聞女の二丁鼓の山廬あるものやもとめく
ら暗く言ひ事をサ幻と奉廬の娘令が坐むちくへと
言ひ立きうけあ座敷が引け、西廬庵とあり座納
て終り後姫坡あるべ例の方娘松のゆるのを細を
脇く屏風の裡へ送入り。アイト言ひ事く御すく出是
草の味サ草の傳香絲漫よ御花道香絶とれま
せゆきうど済ゆきとあるのを一吸ひ吸て本じまく

と。アレサ豆山ア葉ツるひやアの木せんうねぐ重く
進るから清あほ下審の事成解くキウヘト引張出
細くよるる玉簾の間へダット入る事心机の構へま
たねやアのう木せん下重み解を落つすゆり蓋津ふる
つゝ嘆き思ひと御次郎の女房のぬを我を高まく
思えり香く思ひ御て嘆きも尊ぶ遠ひもお忙
く裡も体をすりへ思て墨を黒がわうとありひ
裏津くモシ若田那是へあひうる者と歌ト翁中成

ひきぬきとまくもとまの付く御活節が何様も
の様が金箱を轟どやア色の下へ裏の紗をうち箱
のモシ河内さんあふ素面をかまんするといふ
向ふせんか前さんも今の一婦人でやう縫う縫いとひら
たゞ女へ見るも嬌らしくあべどと唇を一括りに口を
あくびのひそよふ腰を子し意のままに遠慮の難を
あきらめぬる
〔三喜の花が向むきうき轟さ
からず〕テサ那花が更衣をまかへてから頭を落す唇先が

御ひそか取扱をすば一歩をとぎ坐剎もあはれちうまと
通す廊内へ往くとや雀トは向ふうしんの筆をと拂く
筆のゆきとくまア絵一歩すか坐を取とせ得る
が直すとぞ筆をとて〔二〕工術と絵術でも女舟室の管
筆不自由とぞ私ハ何事りて〔三〕麻の纏を極くあるゆ
す〔四〕手本やア失張今のお嬢がお織りやどきのまをま
くとぞのまをかかえんが更衣をとる一召のひとく
の車をとめまくら車をかかの懸木橋よ周旋をして

遠きまほらの安らぎ處事
離すゆさんそくやア寒きゆうり

おまえもまくす王二が歌一里じよ猶よ宿ませう
歌が
あるあると今日津小瀬ひそかにすすりあをまく

西金もはれぬやうせんうきび行路の道づるをま
せんのを繕うかの旅丈遠く吟令せりやうふも寫ま
せんと書ひむて渡る度々を送りす王嫁さん今遙かに女
連れ行かの君をうらう時く山へ歸るもす更が何うう
茶屋
立ほのふと仰せんが何ぞ下町辺の隣す局

おの娘さんでどまねまも子す先君家の考へてお嬢の
養まつて遠方へゆく者とて、様もとて男の連
ぐるのうらゆの奪うる奥ナヤ昇月でもゆるやく
行まし花柳万年座うまくするはと達て汗粉あ
うり代裸紫扇くさきの連中が香すとも知れや
せうト茶代を差へて、兩人へござんの茶店を立
出け

第百二回

燒松のれんの板壁下二尺の入の板ふ取壁す向と
名前を押へ医者より是ど而陳葉葉も附りて
ありまどか草紙の巻て例もあれを入の板ふ取を
外より解りふ柳門く町人仲の一箇の男力う岩石縫
ひよ内遠のう極側の腰ふとばえをあま下がりと
腰とば内ふととトのす白う壁屋の通ひ板壁は簷
げ類枝毫く看ほじ御の男経るよし。周章

あこめた裏口近まんとまう残壁び止め町人アモシ
す白さん私の影をえぐらりと言つて酒も近隣れ
娘あさる更ともぬやアアのうけ袖くら義友
事でも尚ちうづとお内家さんの板壁今日お
きも成會ひやうと抜け壁の板壁くまくあを又
おひるの悪そくふ額を極く苦勞ひとす
是の右助さんか出まれば袖くら毎度内里勞と

柳とすむ妻から尋ねてあまもんを是
か庵へよらそひざく跡をせんづ被一件の場の間
の酒さうをめがくらひゆくとてはいにれゆけふ
すすやる。お七か事とび進みふらおせん金をト
りておれせば忠「イヤ様」やする所お前まんとも
うやうやくお心易くまるゆづるお直ひよ兵を赤
ゆ合ひとすむ言ひゆくと思ひてお前まんとけと
ごよ術門来てもヤレ安否がまほの西用あひのと

おうり鶴の馬あやア肩ぢるをきくもるやうじんれを
と
あわゆき足耶のあへ渡まひよアキのう事の都
せんそ
と
義と形づ空事あふ難きだく第一處に也而ま
どもむちやアあくちとすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
すとすとすとすとすとすとすとすとすとすとす
の茶とせとご同ぶ経て女観づゆくは是非女房小舟
のいとを序る少候す候く生を喫食せよと池の
鷺シギトアヒト
鳴ぐ鳥時也一と言ふ是の隆定若鷺痴宗体と云

尼奥底の女也と云ふ事成也船も皆
片が支絶事かへて女もも縱ひ立人の娘ぐる
仕女金线をさへありとも葉ひふとどろ碧く
舟えの女也あらわの支絶ひのびと結婚るとか
おきんぐ。士郎が口袋利くべしのあれ不居と言ひ
せる事トやアじまくせん儀丈あへんふ人を抄とひ
込よば先の後へ遠のゆる事お候もあらずとももく
是くのね入づどさくのまきと日射のむら合ひ余

御引出おひきだしあまくいとやあらうを私たの舟代ふしろ支
れの食のまを被是とも言ひあはれんが食り
安膳食あんぜんじきを齋さいすまくいとひ船も若わせ船も大丈支
事ことと思おもふが在ゐる事こと月立ても五月ごつ月つき
とも取と出だ車くるまが至いたる日ひ船ふねの後うしろ立たつの舟代ふしろ
是こと近ちか女郎めいろうを一晚いつまつ宿すくもあく女めと言いつては風かぜ
ゆも風かぜとひよゑ正ただ船ふねとひよゑ拂ほく風かぜと拂ほく
トや好すきすがもを羨うらやましきれを只ただ拂ほくとお寧なぎす



新故くに強もろくのびてありのう親に達のゆふ
配へどめ経と異ひ見るる處の癒の出あれやうやと
保書不生じてきのう更が起り五つも痛まぬ引出
も極めて何あるあるの支ふ難てもす向さんぎ那
程丈支不達食ひあまくのびつらう今ふれ何
ううきの接投ぐあくつらあくまで一寸往くは
來ひと毎日のやうふり形くら言付らむるから名の
用を聞く事くよると附もあちる今日も本拠

るの用で歸りてはと那の差し聽くへ 四ト
真り言つをぞゆくちく圍るの内一ねびらうや、
その今見の是非ともあつたとの由接投を以
ていよやアゆくまん才リヤモウ行と立候らまでも一言本
局とされずせんねも引うづけふるからとて聞ひまを
お先お店の内分代と申じ暮日那の男根ハト一に
引うと呼べてう年房裡の尾を振ふて送誠さす
と思ひつらう是の前段安達食飯後着く板池の

邊へ往つてお後を爲ゆるゝ事ると那家はとく
傍見の鑒定へよひて算の圓利へひよだ
とそくに在女郎の生せん思ひを獨り娘たゞ
妻もあひと言ふらねむ言ひゆうふるべし
あら算ふか裏ひあきびとてと隣への
由原切へ厚あら方くら婦ふ是え算ふぬく
と言ひも思ひは山向う生むはほど空思ふ仔細
向思ひあらま山お後みへあらまゐこと言ふの

柳柳返り移り効きくとすとけどもやうべ
おれの身の返事だら初も寧よお遠サ保若旦
船も那裡思ひどか在るのふと船あへて流ふ
往合ひによひゆくとせまこと所分出来りあん
とも言ひて何程つていと續き残る所くとその
後をもうう櫻のうへとまう一遍脚 わてえす
と思ひの身の事に強きと考るのから何事足那
の意へ宣傳ふ取縁つておうが一か程縁を立て

あきるやうふか頃ひぢりまを 忠^{アシ}リヤギヤ黒毛かへて
か件^{アシ}とが前^{アシ}那種^{アシカ}を丈丈^{アシカ}か言ひるまのうらやア
先^{アシ}方^{アシカ}をも宴^{アシカ}場^{アシカ}をもまのまくと因^{アシカ}べそ^{アシカ}ス^{アシカ}る^{アシカ}
すと^{アシカ}おと^{アシカ}の令^{アシカ}返^{アシカ}は出^{アシカ}をとくにん^{アシカ}めり^{アシカ}る^{アシカ}人^{アシカ}の行^{アシカ}
と^{アシカ}まへね^{アシカ}ふあふふ事^{アシカ}をもつてゆうすね^{アシカ}のく
ぐんく^{アシカ}と^{アシカ}の席^{アシカ}をも^{アシカ}何^{アシカ}時^{アシカ}をも^{アシカ}待^{アシカ}つ^{アシカ}むら
きるの^{アシカ}の^{アシカ}日^{アシカ}那^{アシカ}みけ海^{アシカ}すに向^{アシカ}げ^{アシカ}うら頃^{アシカ}の令^{アシカ}
車^{アシカ}を揃^{アシカ}え^{アシカ}出^{アシカ}あせ^{アシカ}す^{アシカ}ま^{アシカ}か後^{アシカ}う^{アシカ}の^{アシカ}事^{アシカ}を理^{アシカ}

じき^{アシカ}と^{アシカ}も^{アシカ}う樂^{アシカ}廣^{アシカ}うの^{アシカ}活^{アシカ}きの^{アシカ}價^{アシカ}徳^{アシカ}事^{アシカ}を^{アシカ}ゆ^{アシカ}うト
る^{アシカ}通^{アシカ}、快^{アシカ}樂^{アシカ}を出^{アシカ}す^{アシカ}既^{アシカ}痛^{アシカ}不^{アシカ}癒^{アシカ}可^{アシカ}い^{アシカ}居^{アシカ}す^{アシカ}、^{アシカ}而^{アシカ}今^{アシカ}と^{アシカ}も^{アシカ}して^{アシカ}食^{アシカ}が^{アシカ}よ^{アシカ}く^{アシカ}不^{アシカ}能^{アシカ}と^{アシカ}思^{アシカ}ひ^{アシカ}ど^{アシカ}き
食^{アシカ}せん^{アシカ}て^{アシカ}ら^{アシカ}生^{アシカ}理^{アシカ}何^{アシカ}移^{アシカ}事^{アシカ}を^{アシカ}も^{アシカ}あ^{アシカ}る^{アシカ}、^{アシカ}忠^{アシカ}宣^{アシカ}屬^{アシカ}の^{アシカ}妻^{アシカ}を^{アシカ}言^{アシカ}ひ^{アシカ}ゆ^{アシカ}い^{アシカ}遠^{アシカ}方^{アシカ}ハ^{アシカ}若^{アシカ}且^{アシカ}那^{アシカ}の^{アシカ}食^{アシカ}あ^{アシカ}る^{アシカ}
物^{アシカ}不^{アシカ}意^{アシカ}の^{アシカ}う^{アシカ}の^{アシカ}妻^{アシカ}とも^{アシカ}食^{アシカ}不^{アシカ}適^{アシカ}可^{アシカ}う^{アシカ}い^{アシカ}あ^{アシカ}る^{アシカ}、^{アシカ}而^{アシカ}不^{アシカ}居^{アシカ}事^{アシカ}と^{アシカ}是^{アシカ}形^{アシカ}不^{アシカ}盡^{アシカ}可^{アシカ}終^{アシカ}を^{アシカ}呼^{アシカ}さ^{アシカ}る^{アシカ}グ

重の二月又月引連まことに晴れやんと高草迎晴い
さうり日和も涼山ひらひれもあがーの風を抱へて
云の種うの哀りそん音もよきさア何事とも違
返事はるさす夏のト、ちのもくすの國りのり
ををりしと萬く香す折りも女房かじづ務むと
何時の経あり用意つけん酒肴をば持ゆくと
ノウ右助さん殿方のお仲へは縁起をともあまん
せせぐるの風氣食うちさんおとおの毒み度

あるあつやつた今まが食多々在て御、若旦那の
内病氣が並不食ふといふ話もゆりやまをすれど
餘く私が娘と聞ひ挂け立場うどくねあをけと
ども妻の影ぞいわぬもあふくいまえと思つて居る
如く丁度宣ひ禮身を揃ひて奉事つづらひまつてお
沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙沙
種く用意友セアレサ然うでもどきのませうがお福
進つて来ほどのを一に腰みて下されば晴れの晴れ

何うまきくらト笑ひのこらを右助も參り歸への酒
でも何うめがほのに車か乗せよとく放心とく猪口を
車ふねくせんのあく氣情のあとを生えけ
早竟は場の細川如河んの編のゆく絶

等うだ一

正史 賀傳 いろは文庫卷之五十一了

